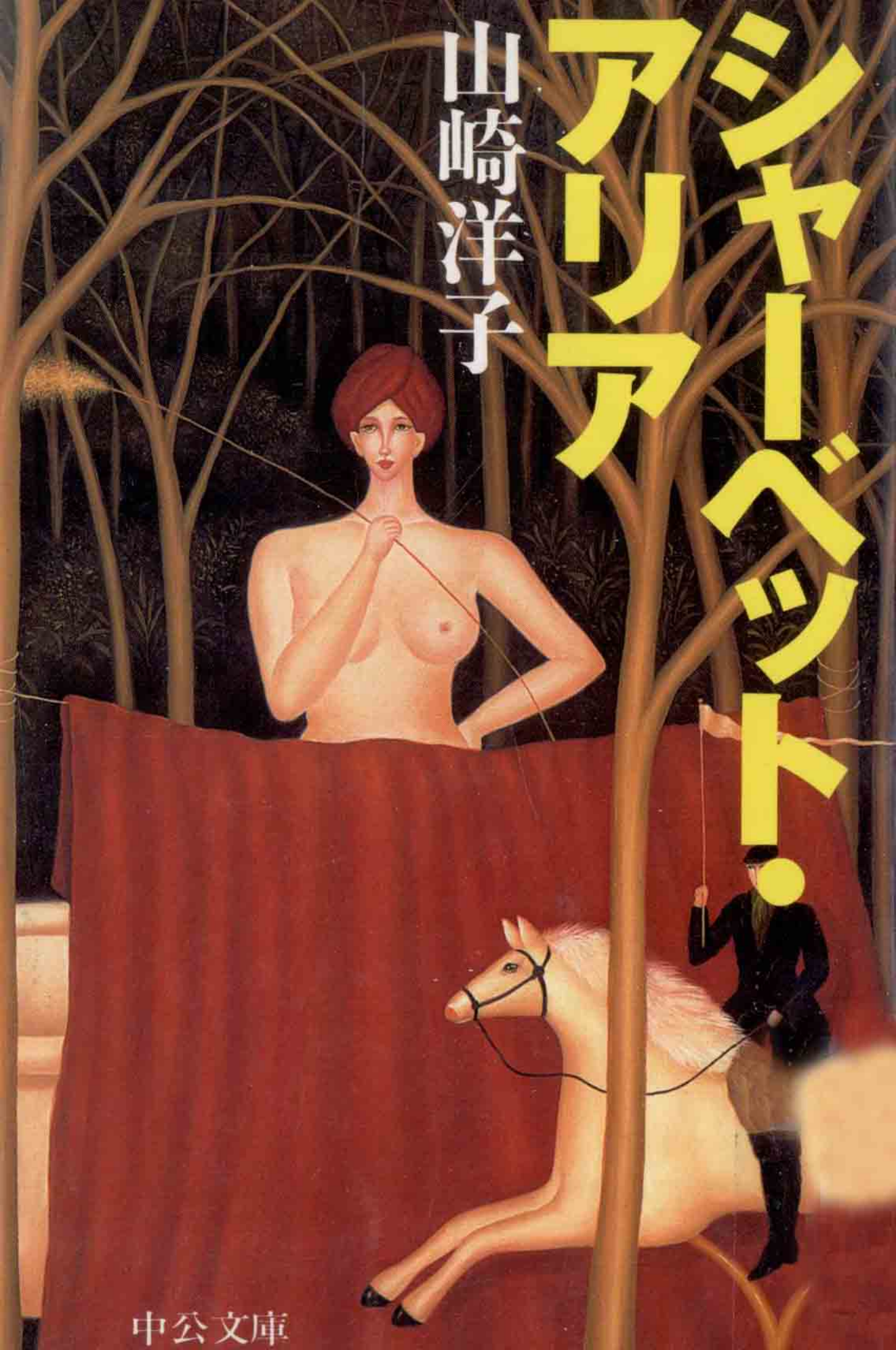
シャーベット・アリア

山崎洋子



中公文庫

中公文庫

シャーベット・アリア

定価はカバーに表示してあります。

1997年6月3日印刷
1997年6月18日発行

著　者　山崎洋子（やまざきようこ）

発行者　笠松　巌

発行所　中央公論社　〒104 東京都中央区京橋2-8-7　振替 00120-4-34
TEL 03-3563-1431(販売部)　03-3563-3664(編集部)

©1997 CHUOKORON-SHA,INC. / Yoko Yamazaki

本文・カバー印刷 三晃印刷　用紙 王子製紙　製本 小泉製本

ISBN4-12-202881-7　C1193　Printed in Japan

乱丁本・落丁本は小社販売部宛お送り下さい。送料小社負担にてお取り替えいたします。

中公文庫

シャーベット・アリア

山崎洋子

中央公論社

目次

シャーベット・アリア　5
解説　松原惇子　423

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

シャーベット・アリア

佐伯真生のお通夜は、十一月一日の午後六時から、彼女の自宅で行われることになっていた。憂子が最寄り駅の小田急線梅ヶ丘へ着いたのは、五時十分である。ファックスで送ってもらった地図によると、真生の家まではここから徒歩五分から十分といった見当だ。まだかなり早い。

なにか手伝ったほうがいいかもしれないと思い、いや、親しい付き合いだったのは昔だけだから、かえって差し出がましいかもしれないと思い直し、ぎりぎりまで迷っていたせいで、いずれにしろ中途半端な時間になってしまった。

まあいい。とりあえず真生の娘にお悔やみを言って、明日のお葬式を手伝いましょうかと申し出てみよう。

落葉の目立つ舗道を、憂子はゆっくりと歩いた。それでも十分後にはその家に到着

していた。二階建ての真新しい家で、閑静な住宅街の中ほどにあった。白いボードを張りつけただけのプレハブ住宅だが、玄関ポーチの絵タイルや、三角形に突き出た出窓などが、派手過ぎない程度にその家をきわ立たせている。二坪ほどの小さな庭も、芝生がきれいに手入れされていた。

この家は真生の持ち物なのだろうか。だとすればたいへんな財産だ。土地も家も決して広くはないが、東京の一等住宅地である。坪五百万は下らないだろう。真生の身内といえば二十二歳の娘がひとりいるだけのはずだが、相続税はどのくらいかかってくるのか……などと俗なことを考えながら、憂子はインターフォンのスイッチを押した。

通夜の張り紙は出ているが、受付らしきものはまだ用意されてないようだ。あたりに喪服姿の人も見当たらない。あと約三十分でお通夜が始まるにしては、奇妙なほど静かである。

しばらく待ってドアが開いた。顔を覗かせたのは小太りの中年女性だった。ひとめでイミテーションとわかる大粒真珠の、二連ネックレスをぶらさげている。なにか食べていたらしく、口を動かしながら憂子を大きな眼で見返した。

「あの、真生さんのお通夜に……」
憂子がそう言いかけると、相手はいきなり大声でさえぎった。
「やだ、高村さんでしょ？　そうよねえ」
高村というのは憂子の旧姓である。戸惑っている憂子の手を、二連真珠の女は構わず中へと引っ張った。
「いいから上がんなさいよ」
玄関を入ってすぐのところに階段があった。二連真珠は憂子を手招きし、先に立ってそこを上がっていく。憂子はようやく彼女のことを思い出した。高校の同級生だ。たいして親しい仲ではなかったから名前までは思い出せないが、顔に見覚えがあった。眼の下のたるみを取り、ふくらんだ頬のあたりをすっきりさせて、さらに腰回りや首のあたりの肉を削ぎ落とせば、なんとかセーラー服姿がよみがえる。
それにしても彼女と自分は同じ年齢だ。四十二歳というのは、こんなにも老けているものだろうか。少なからぬショックを受けながら、憂子は目の前で揺れている黒いワンピースの臀部（でんぶ）を見つめた。
二階には狭い廊下があり、ドアがふたつ並んでいた。二連真珠がそのドアのひとつ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

を開くと、似たような顔がふたつ、憂子を見上げた。そういえばこれも同級生だ。

「高村さんよ。ほら、真生さんとコーラス部で一緒だった……」

二連真珠が中の二人に言った。

「あらあ、お久し振りい」

「お久し振りどころじゃないわよ。二十何年振りじゃない？」

部屋にいた二人は、嬌声とも聞こえかねないような声で憂子を迎えた。六畳ほどの部屋が、紫色の薔薇で埋まっている。そこに黒い服、見るからに〝おばさん顔〟の女たちがぺたりと座っているのは、なんとも陰気な眺めだった。生花の薔薇が手内職の紙製に見える。彼女たちが買ってきたらしい肉マンが絨毯の上に置かれていた。その匂いが、内職的雰囲気をいやがうえにもたかめている。

「いえね。あたしたち、なんか手伝おうと思って五時にここへ来たのよ。そしたら娘さんが、うちは無宗教だから、坊さんも呼ばないし、お料理出したりもしないっていうじゃない。でもせっかく来たんだからなにか手伝わせてほしいって言ったら、じゃあ二階に薔薇があるから、一本ずつセロファンで包んでくださいって……」

二連真珠が薔薇を顎（あご）でしゃくりながら説明した。

「一緒にやらない？　他にすることもないみたいだし」
黒いスーツには不似合いなほど唇を赤く塗った一人が、手招きしながら横座りの腰をひょいとずらした。もう一人が同じように腰をずらし、憂子の場所を作った。彼女のストッキングには長い伝線が走っていた。その伝線の端が透明なマニキュアで手当てしてある。憂子は急いで眼をそらし、狭い空間にとりあえず腰を下ろした。
それにしても、高校時代、真生とあれほど親しかった自分でさえ、手伝いを申し出ようかどうしようかと迷ったほどなのに、なぜ名前すら覚えていない彼女たちがここにいるのだろう。どうみても、真生が好んで付き合うタイプとは思えない。
「高村さん、シナリオライターなんでしょ。真生さんに聞いたから知ってるわよ。新藤憂子っていうのよね、いまの名前」
薔薇とセロファン紙を憂子の手に押しつけながら、二連真珠が言った。
「あらほんと？　あたし知らなかった。ねえ、なに書いてるの、なに？」
伝線ストッキングが甲高い声を上げる。真っ赤な唇が、憂子の左手薬指にある指輪にちらりと眼をくれた。
「でも結婚してるんでしょ？　お子さんは何人いらっしゃるの？」

「まああれこれと二時間物とか連続ドラマなんかを……子供はいないのよ」
憂子はふたつの質問にまとめて答え、逆に尋ねた。
「皆さん、真生と付き合ってらしたの？」
「三人とも、子供を真生さんの英会話教室に通わせてたの。もう五年くらい前かな、あたしが偶然知って、彼女たちを誘ったのよ」
答えたのは二連真珠である。
そういうことだったのか、と憂子は納得した。すると彼女たちは、真生が入院したのももちろん知っていたわけだ。
「それにしてもさあ」
真っ赤な唇が、声をひそめる。
「真生さんって、英会話教室の他にいろいろやってたでしょ。ピアノも教えてたし、フラワー・コーディネイターなんていうのもやってたじゃない。女手ひとつですごいわよねえ。この家だけでも相当な財産じゃない？　二億？　三億くらいいくかしら。これだけの家持ってるんだから、当然他にもあるでしょうしね。預金とか株とか」
「むかし結婚してた相手、たいへんな御曹司なんでしょ。離婚の慰謝料だって相当入

ったんじゃない？」
と、今度は伝線ストッキング。喋りながら肉マンを一個取り、憂子に差し出した。
憂子は手を振ってそれを断り、紫の薔薇の群れを見回した。
「この薔薇、なにに使うの？　みんなが一本ずつお棺に入れるのかしら」
「普通はそうよね」
と、二連真珠。
「でもこれは逆に、来た人ひとりひとりに一本ずつ持って帰ってもらうんですって。だからこうやってセロファンかけてるのよ」
「お香奠（こうでん）も辞退なのよ。食べ物や飲み物を出さないとはいえ、やっぱり持ち出しよね。安くないでしょ。これだけの薔薇」
「でもほら、お金持ちだから」
真っ赤な唇が手をひらひらさせながら口を挟む。
真生らしいやり方だ、と憂子は思った。彼女がどの程度金持ちだったのかは知らない。が、たぶん、わたしのお通夜と葬式はこういうふうにして、と彼女自身が言い残して死んだのだろう。

階段を上がってくる足音がして、二十代後半くらいの女性が二人、部屋へ入ってきた。

「薔薇、できたのがあったらいただいていきます。そろそろ弔問の方々がみえると思いますので」

そう言って、セロファンのかかっている分を集め始めた。

「御遺体はどこにありますか？」

憂子はその女性たちに尋ねた。

「玄関を入ったところにある部屋です」

一人が答えた。ついでに真生の娘がどこにいるのかも尋ねた。キッチンだと彼女は答えた。

憂子は階下へ下り、応接間らしい部屋へ入った。壁の一面が天井までの飾り棚になっており、そこにさまざまな国で買い集めたらしい置物が飾ってある。陶器の薔薇、木彫りの薔薇、布の薔薇、薔薇のポプリ……と、薔薇づくしだ。あなた、好きだったものね、薔薇が……と、憂子はブルーグレーの絨毯の上に置かれた白木の棺に語りかけた。

棺の前に座り、顔の部分にある小窓に手をかけた。開けるのがためらわれた。二階にいる同級生たちの顔が浮かぶ。真生もあんなに老けているのだろうか。それなら見たくない……。

高校時代の真生はほんとに美しかった。背が高くて色白で、目鼻立ちがはっきりしていた。印象としては明るいのだが、時折、気軽に話し掛けるのをためらわせるほど、大人っぽい翳を漂わせていることもあった。男の子にも騒がれていたが、ほとんどそれを意識していないところがまた魅力で、同性にも人気があった。

真生と親友であることが、憂子は得意だった。真生の後をついて回り、真生の好きになるものは必ず憂子も好きになった。春の雪解け水のように新鮮な真生の笑顔を、憂子はいくつものバリエーションで思い出すことができる。

結婚しても子供ができても、二人は一生親友でいるに違いないと、憂子のほうは信じていた。が、その親密な仲は、高校を卒業して一年足らずで壊れた。

憂子は四年制大学、真生は短大へと進み、最初のうちはかなり頻繁に会っていたのだ。ところが、いつの間にか真生は恋愛し、妊娠までして、短大を中途退学してしまった。相手は大家電メーカーの御曹司だった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com